

レジメ

第 52 回日本国際経済学会関西支部総会報告 2010 年 6 月 12 日午後 2 時～、於：和歌山大学 4F 小ホール

韓国併合 100 周年—韓国併合と内鮮一体化論

本山美彦（大阪産業大学）

はじめに

日本には、日清、日露戦争に踏み切る以外の選択肢がなかったのかを、真摯に自省してみることが、韓国併合 100 周年の 2010 年には、とりわけ必要なことである。「坂の上の雲」賞賛のオンパレードとは、何たることか。

遠くから日本を眺めていたネルーの次の言葉が、当時のアジア人の偽らざる心境を伝えている。

「（日清戦争の日本の勝利によって）朝鮮の独立は宣言されたが、これは日本の支配をごまかすヴェールにすぎなかった」（ネルー[1996]、170 ページ）。

「日本のロシアにたいする勝利がどれほどアジアの諸国民をよろこばせ、こおどりさせたかを、われわれはみた。ところが、その直後の成果は、少数の侵略的帝国主義諸国のグループに、もう 1 国をつけくわえたというにすぎなかった。そのにがい結果を、まず最初になめたのは、朝鮮であった。日本の勃興は、朝鮮の没落を意味した」（同、181 ページ）。

1 清を嵌めた陸奥宗光

陸奥宗光（むつ・むねみつ）の『蹇蹇録』には、次の文言がある。

「この際如何にしても日清の間に一衝突を促すの得策たるべきを感じたるが故に、（1894 年）7 月 12 日、大鳥公使に向かい北京における英国の仲裁は已に失敗したり、今は断然たる処置を施すの必要あり、いやしくも外国より甚だしき非難を招かざる限り何らの口実を用ゆるも差支えなし、速やかに実際の運動を始むべしと電訓せり」（陸奥[1983]、73 ページ）。

当時、清と朝鮮との関係は、朝貢体制であった。朝貢体制というのは、中国の皇帝を頂点とし、他国は、中国に頭を下げる宗属国という地位に甘んじるという関係を指す。しかし、こうした上下関係はあくまでも建て前であって、実際には、他国は独立を保ち、清からの指令を受けていなかった。しかし、壬午事変が、事情を一変させた。清は朝鮮の政治に介入するようになったのである。

これに反発したのが金玉均（Gim Ok Gyun）などのいわゆる開化派であった。彼らは欧米列強の力を借りて朝鮮を近代化させようとしていた一派であった。

日清戦争によって、朝鮮から清の勢力を排除した日本であったが、朝鮮の単独支配には

成功しなかった。閔氏一族がロシアの支援を受けて朝鮮で復権してきたからである。それを阻止すべく、王妃の閔妃 (Minpi) 虐殺事件が起こり (1895 年 10 月)、親日政権ができた。親露、親日派による血みどろの内紛の後、1897 年に、それまでの国王・高宗 (Kojong) を皇帝とする新政権が成立し、大韓帝国という国号になった。そして、新政権は、1900 年、ロシア人顧問を退去させ、日本に対して新生韓国の中立維持の交渉を開始した。ロシアも 1901 年に韓国の中立を保証する協議を日本に提起したが、日本はロシアの申し込みを拒否した。新たに国号を改称した韓国の単独支配を日本は狙っていたからであるのは言うまでもない。

1902 年に日英同盟 (Anglo-Japanese Alliance) が成立する。英国からの全面的支援を受けることになった日本は、その翌年の 1903 年、強硬姿勢で日露交渉に向かうことになった。韓国における日本の権益確保については、一切、ロシアに文句を言わず、満州においては多少、ロシアに譲歩するというシナリオであった。交渉が決裂すれば、対露開戦に踏み切ることも視野に入れた交渉だったのだろう。事実、1904 年 2 月、日本は交渉を一方向的に打ち切り、ロシアに宣戦布告をした (1904 年 2 月 6 日)。

日露戦争後のポーツマス講和条約 (1905 年 9 月) によって、日本は、ロシアに、日本による韓国の単独支配を認めさせた。そして、1905 年 11 月 17 日、「第 2 次日韓協約」によって、韓国を完全に保護国化してしまった。保護国とは、国際法上、国家主権を無くした国のことである。ただし、保護国にしてしまうには、韓国と公使などを交換し合って外交関係を持つ諸国の同意を得る必要がある。日本は、米国のフィリピン領有、英国のインド領有を認める代わりに、韓国の保護国化を英米に認めさせたのである (高井[2009]、12 ページ)。

「第 2 次日韓協約」は、軍事的威嚇下で強要されたもので、無効であると皇帝の高宗が諸外国に働きかけていたことを理由に、1907 年高宗の廃帝、軍隊の解散を日本は強行した。当然、韓国人による抗日闘争は激化した。1907 年から韓国併合が行われる 1910 年までのわずか 3 年間で、韓国人の義兵と日本軍との抗戦回数は、2800 回を超えたという (高井[2009]、13 ページ)。

2 時代と闘った日本基督教会牧師・鈴木高志

日本基督教会に属する全羅北道 (Jeollabuk-do) 群山 (Gunsan) 教会に鈴木高志という牧師がいた。1919 年 3 月 1 日の朝鮮における 3・1 独立運動直後の 5 月、彼は、日本基督教会機関誌『福音新報』(1919 年 5 月 8・15 日) に以下のような日本人批判を寄稿している。それは、今日の私たちにも感動を与える文である。

鈴木論文は、長い格調高い旧文体ではあるが、現代的には読みにくいので、平たく要約

させていただきます。タイトルは「朝鮮の事変（独立運動）について」である（〈 〉内に要約）。

＜暴動は鎮圧できるであろう。しかし、鎮圧できないのが、朝鮮人の精神、つまり、彼らの排日思想である。排日思想という彼らの感情は根深い。

そうした感情が生まれたのには、いろいろな要因がある。遠因としては、朝鮮人の対日軽蔑、倭寇への憎悪、豊臣秀吉への怒りがある。近因としては、併合への反感、日本の独善的（主我的）帝国主義への反発、政治的不満、経済的不安、社会的差別への反感、日本人の道徳のなさへの反感、などが考えられる。

しかし、最も大きな要因は日本の主我的帝国主義への反発である。根本には日本の国是に対する反発がある。これは、朝鮮だけの反発ではない。中国、米国、豪州でも同じである。世界に存在している排日思想は、日本の主我的帝国主義が生み出したものである。それは日本の帝国主義が生み出している影である。影を憎む前に、先ず自身を省みる必要がある。「国威を海外に輝かす」、「大いに版図を弘める」、「世界を統一する」とかが日本の理想とされ、それを主義として進んできた結果が、隣近所をすべて排日にしてしまつて、日本の八方塞がりを招いている。

朝鮮人も人間である。国民的自負心もあり国家的愛着心もある。ところが、日本人は、愛国心を日本人のみの専売特許のように思い込んでいる。「日本主義」を謳って、日本人は、傍若無人に振る舞ってきた。そうするかぎり、日本に対する彼らの反感は止むはずはない。私たちは、このような日本主義的精神から脱（擺脫、ひだつ）して、「自分を愛するように隣人を愛する」という愛の道徳に立たねば、東洋での位置を確保できなくなるであろう。ところが、日本の学校では、倭寇、征韓の役の武勇伝が、年少者たちの血を沸かす題目になっている。朝鮮では、この題目が排日思想の種子蒔となっているのである。当然である。倭寇は、沿岸のいたるところで家を焼き、物を奪った。虎よりも恐いものは日本人であった。征韓の役にいたっては、全国焦土となり、朝鮮はこの役以来、疲弊して復興することができなくなったのである。朝鮮人としては日本を恨まざるを得ないのである。

にも拘わらず、日本の国民教育方針は 10 年経っても、20 年経っても、依然としてこの主我的帝国主義の外に出ない。日本の教育における修身、歴史読本、唱歌のいずれの教科科目も、旧式日本の愛国心を鼓舞（涵養）するだけである。日本の愛国心は、自国本位、無省察、唯物的である。日本だけを知って、他国のことを考えないものである。その結果、海外に住むのに非常に不向きな日本人を造り出してしまった。朝鮮に来ている日本人は、婦女子にいたるまで威張ることのみを知って、愛することを知らない。取り立てることを知って、与えることを知らない。「われわれは日本人なり」とふんぞり返り、下に立つ道徳を知らない。それどころか、「上に立つ者は権力を握る」という意識で朝鮮人を圧倒し、蹂躪する。それが日本魂であるかのように心得ている。

朝鮮人は、買物に行っても、役所に行っても、つまり、どこに行っても、日本人に敬愛されることがない。いつも、日本人によって蹂躪され、馬鹿にされ、虐げられているという感覚のみを味わう。併合への反感、総督政治に対する不満もある。日本人が資本の威力を発揮して、広大な土地を買い占め、利益を貪るのを見て、経済的不安の念に駆られ、日本人駆逐すべしと言う朝鮮人もいる。すべての朝鮮人は、社会的に悪く待遇されていることから日本人に反感を抱いている。だからこそ、今回の独立運動は、燎原の火の勢いで各地に波及したのである。その根本原因は帝国主義の中毒にある。今日の学校、今日の軍隊の教育方針では、水原事件（Suwon）のようなことが生じるのは必然である。いくら総督府で善政を布こうとしても駄目である。日本人の素質が変わらねばならないのである（『福音新報』第1246号、小川・池編[1984]、456～61ページ）。

3 倭館の歴史と日清戦争から始まった日本の海外神社の政治化

日本人の海外展開とともに、いわゆる海外神社が各地の日本人居住区に建立された。海外神社という名称は、菅浩二（すが・こうじ）によれば、神職で神社研究者・小笠原省三によって初めて使われたものであるという（菅[2004]、1、51ページ）。海外に日本の宗教の一翼を担う神社が造営されたということ事態はめくじらを立ててあげつらうようなものではない。日本人の土着信仰の代表であった古来からの神話上の神を祀るという行為は、どの国の人たちにも見られる自然な郷土意識の発露だからである。それでも、日本の敗戦時に海外神社の多くが現地の人たちによって焼き討ちにあったことに衝撃を受けた上記の小笠原省三は、日本の海外神社が初発から日本の侵略の先兵であったとの贖罪の気持ちを率直に吐露している（小笠原[1953]、3ページ）。ちなみに、この小笠原は、後述する朝鮮神宮の造営に対して、神功皇后を祭神とするという日本政府の方針に強く反対し、朝鮮には朝鮮の土着の神を祀るべきだと主張した神官であった（菅、同書、52ページ）。

倭館について説明しておきたい。純粹に交易の窓口であったはずの倭館は、明治政府による対韓国強硬政策の犠牲になった事例を示すものだからである（田代[2002]と村井[1993]に依存した）。

倭館は、李氏朝鮮（朝鮮王朝）時代に朝鮮半島南部に設定されていた日本人居留地のことである。豊臣秀吉による朝鮮侵略（文禄・慶長の役、韓国では壬辰倭乱（Imjinwaeran）・丁酉再乱（Jeongyujaeran）と呼称）以前には複数存在していたが、江戸時代には釜山に限定され、日本側は対馬藩が管理していた。

朝鮮半島は、中世以降、海賊の倭寇にずっと苦しめられてきた。1392年に成立した李氏（Isi）の朝鮮王朝（Choson Wangjo）も、日本船の入港地と日本人居住地区を、当時の富山浦（Busanpo、現在の釜山広域市・Busan-Gwangyeoksi）、同じく当時の乃而浦（Neipo、現在の慶尚南道鎮海市・Gyeongsangnamdo Jinhaesi）、そして、当時の塩浦（Yonpo、現在の蔚山

広域市・Ulsan-Gwangyeoksi) という3つの港地区(三浦=Sampo)に制限しようとしていたが、これも、1510年、居留日本人の暴動(三浦の乱=さんぼのらん)などによって、日本人を押さえ込むことに失敗し続けた。反乱の中心勢力は、倭寇の拠点であり、朝鮮との交易に利益を持つ対馬の宗氏であったと言われている。

海外神社に話を戻そう。

明治時代に入って、日本人の韓国進出が活発になると、対馬藩が造営した上記の金比羅神社は、1894年に「居留地神社」と改称され、さらに、1899年に大造営されて「龍頭神社」になった。

この時に、祭神として、神功皇后が追加されたのである。それだけではない、同時に朝鮮人にとって、最も忌まわしい侵略者である豊臣秀吉までもが「豊国大神」として祀られることになった(龍頭神社社務所[1936]、36~41ページ、及び、菅[2004]、170~71ページ)。ちなみに、1901年には官幣大社の台湾神社が建設されている。神社組織は、キリスト教に対抗して、明確に清・韓の民衆を懐柔するために、伊勢神宮を頂点と仰ぐ海外神社建設の促進を決議した(佐伯[1905]、1~6ページ)。

1906年には、韓国に神社を建設して「国民的教化」を行うべきことが、福本日南(ふくもと・にちなん)などによって、関西(くわんせい)連合会第1回大会で決議された(菅[2004]、56ページ)。ちなみに、福本は、陸羯南(くが・かつなん)と共に1989年に新聞『日本』を総監し、「忠臣蔵」ブームを起こした人である。

日本政府は、この頃から韓国におけるキリスト教を強く意識するようになっていた。現在の韓国のクリスチャンは、カトリック、プロテスタントを合わせて人口の3分の1を占める。これは日本の1%に比べて非常に大きな数値である。韓国ではナショナリズムとキリスト教とが強い結びつきを持っていたことに特徴がある(Grayson[1993], p. 13)。

この点について、初期の日本の為政者たちは熟知していたので、キリスト教との共存を図っていた。1905年、日本は韓国の外交権を事実上奪い、統監府を設置したが、初代統監の伊藤博文は、メソジスト(Methodist)の宣教師に対して、朝鮮人の精神生活を豊かにするように依頼するという宣教師懐柔を試みた。宣教師の本国への影響力を重視していたのである(朝鮮総督府[1921]、6ページ)。懐柔策は一定の効を奏して、韓国は他の列強に支配されるよりは日本に支配された方がよいという宣教師まで出ていたという(姜渭祚[1976]、34ページ)。

伊藤博文が暗殺された後になると、日本政府と朝鮮総督府は、それまでとは一転して、キリスト教を敵視するようになった。韓国のキリスト教は、韓国併合に反抗する強力な組織と決めつけられた。例えば、朝鮮総督府は、1865年、アーサー・サリバン卿(Sir Arthur Sullivan)によって作曲されたという賛美歌、「進めキリストの兵士たちよ」(Onward Christian Soldiers)やプロテスタントの国際的な福音伝道組織である「救世軍」(Salvation Army)などに、露骨な警戒感を示していた(Clark[1971], p. 187)。この救世軍というのは、メソジ

スト教会牧師、ウィリアム・ブース (William Booth) が 1865 年に設立した「東ロンドン伝道会」 (East London Christian Mission) が始まりで、1878 年に改称したものである。

明治政府が、「韓国併合に関する件」を閣議決定したのが、1909 年 7 月 6 日であった。

「韓国を併合し之を帝国版図の一部となすは我が実力を確立するための最確實なる方法たり。帝国が内外の形成に照らし適當の時期において断然併合を實行し半島を名実共に我が統治の下に置き諸外国との条約關係を消滅せしむるは帝国百年の長計なりとす」 (吉岡 [2009]、67 ページより引用)。

これは、日本が、韓国併合でアジアの列強として欧米に認知させ、当時の不平等条約改正を 100 年の計として狙っていたことが率直に吐露された決議である。

1909 年 7 月 6 日の閣議決定を受けて、各国との調整を始めた明治政府は、10 月伊藤博文をロシアとの交渉に当たらせた。しかし、1907 年 7 月 24 日、日本軍の武力で威嚇的に調印させられた「第 3 次日韓協約」で軍隊を解散させられた韓国では、両班 (Yangban) 層とクリスチャンたちが義兵 (Uibyeong) 闘争を本格的に展開することになった。

その典型が、両班出身で、カトリック信者であった安重根 (An Jung Geun、1879~1910 年) である。彼のクリスチャン・ネームはトマス・アン (Thomas An) であった。東学 (Tonghak) に反対していた安は追われてカトリックに属するパリ外国宣教会 (Société des Missions Etrangères) のジョゼフ・ウィレム (Nicolas Joseph Marie Wilhelm) 司祭に匿われて洗礼を受けた。そして、安は、1907 年大韓帝国最後の皇帝・高宗の強制退位と軍隊解散に憤激し、ウラジオストクへ亡命、抗日闘争に身を投じる。そして、1909 年 10 月 26 日、ハルピン (哈爾濱、Harbin) 駅構内において、ロシア蔵相のウラジーミル・ココフツォフ (Vladimir Nikolayevich Kokovtsov) と会談するために現地に向かっていた伊藤博文 (暗殺当時枢密院議長) に対し安重根は群衆を装って近づき拳銃を発砲、大韓帝国の国旗を振り韓国独立を叫んだ (Keene [2002], pp. 662-67. 邦訳、[二〇〇七]第四分冊、二六九ページ)。

1910 年 8 月 22 日、日韓両政府の間で「韓国併合に関する条約」の調印があった。条約の第 1 条には、韓国皇帝による日本皇帝への「統治権の譲与」が明記された。文面は、

「第 1 条 韓国皇帝陛下ハ韓国全部ニ関スル一切ノ統治権ヲ完全且永久ニ日本国皇帝陛下ニ譲与ス」、「第 2 条 日本国皇帝陛下ハ前条ニ掲ケタル譲与ヲ受諾シ且全然韓国ヲ日本帝国ニ併合スルコトヲ承諾ス」

という韓国側の尊厳を踏みにじる冷酷なものであった。ここに、李朝 500 年の歴史が事実上閉じた。その 1 か月後、勅令「朝鮮総督府官制」により、朝鮮総督府が設置され、それまでの統監・寺内正毅 (てらうち・まさたけ) がそのまま初代朝鮮総督に任命された。

「併合」という用語は、当時、一般的なものではなかった。この用語は、1909 年 3 月に、外務省政務局長・倉地鉄吉が、外相・小村寿太郎の命で作成した「対韓大方針」草案の中で使われていた。対等の合邦でもなく、さりとて、完全隷属させるという雰囲気避けつつ、日本が韓国を支配下に置くという政治的に配慮した用語が「併合」であった (海野

[1995]、209 ページ)。ちなみに、1895 年の台湾割譲は、清朝のお膝元を意味する「直隸」が日本の直轄地に変更されたという意味で「改隸」という用語が使われた。

融和姿勢を示していた時の伊藤への対韓強硬派の日本人は、統監府非公式顧問の内田良平、韓国金融副大臣の木内重 4 郎、右翼の杉山茂丸（しげまる）の面々であった。

おわりに

いずれにせよ、日本人は、文化を伝えてくれた師たちを輩出してきた地、私たちの父祖の地の人々の心をついにつかめなかった。日本の権力者を批判することはたやすい。しかし、彼らを権力の座に押し上げたのは日本の庶民である。韓国併合 100 周年。同じことを私たち日本人は繰り返している。

専門家だけでなく、素人も、自己の生活感覚に基づいて時代に異議申し立てをしなければならぬ時がある。いま、自分たちが冒してしまった行動に対する自省を言葉にしなければ、私たち日本人はかなりの長期に亘って、歴史の闇に押し込められることになるだろう。時代は、私たち日本人に対して苛酷な試練を与えている。こんな大事な時に、「坂の上の雲」！ 哀しい空気である。

文献

李鍊[2006]、「朝鮮総督府の機関紙『京城日報』の創刊背景とその役割について」、『メディア史研究』21 号、12 月。

小笠原省三編[1953]、『海外神社史・上巻』海外神社史編纂会。

小川圭治・池明観編[1984]、『日韓キリスト教関係史資料、1876～1922』新教出版社。

桂太郎[1951]、『桂太郎関係文書』、国立国会図書館所蔵。

姜渭祚、沢正彦訳[1976]、『日本統治下朝鮮の宗教と政治』聖文社。

姜在彦[1982]、『朝鮮近代史研究』（第 2 版）日本評論社。初版は 1970 年。

金正明編[1964]、『日韓外交資料集成』（全 10 巻）巖南堂書店。

国立公文書館[1936]、『公文類聚』、第 60 編、第 58 巻、社寺門・3。

黒龍会[1966]、『日韓合邦秘史』（全 2 巻）原書房、初版は 1930 年。

佐伯有義[1905]、『全国神職会会報』、第 69 号。

菅浩二[2004]、『日本統治下の海外神社—朝鮮神宮・台湾神社と祭神』弘文堂。

田代和生[2002]、『倭館—鎖国時代の日本人町』文春新書。

朝鮮総督府[1921]、『朝鮮の統治と基督教』。復刻、青柳 綱太郎・朝鮮総督府『韓国植民策、韓国植民案内・朝鮮の統治と基督教（韓国併合史研究資料）』龍溪書

舎、1995年。

高井弘之[2009]、『検証「坂の上の雲」えひめ教科書裁判を支える会。

寺内正毅[1964]、『寺内正毅文書』、国立国会図書館所蔵。

徳富蘇峰編「1929」、『素空山縣公伝』山縣公爵伝記編纂会。

中塚明[2009]、『司馬遼太郎の歴史観—その「朝鮮観」と「明治栄光論」を問う』高文社。

ネルー、ジャワーハルルール、大山聡訳[1966]、『父が子に語る世界歴史、第4巻「激動の19世紀」みすず書房。

藤村道生[1973]、『日清戦争』岩波新書。

陸奥宗光[1983]、中塚明校注『新訂・蹇蹇録』岩波文庫。

村井章介[1993]、『中世倭人伝』岩波新書。

梁賢恵[1996]、『尹致昊と金教臣・その親日と抗日の論理—近代朝鮮における民族的アイデンティティとキリスト教』新教出版社。

吉岡吉典[2009]、『「韓国併合」100年と日本』新日本出版社。

龍頭神社社務所[1936]、『龍頭神社史料』、国立公文書館[1936]、所蔵。

Chung, Chong Wha & J. E. Hoare[1984], *Korean-British Relations: Yesterday, and Tomorrow*, Center for International Studies of Ch'ongju University.

Clark, Allen D.[1971], *A History of the Church in Korea*, Christian Literature Society of Korea.

Grayson, James H.[1984], "The Manchurian Connection: The Life and Work of The Rev. Dr. John Ross," in Chun & Hoare[1984].

Grayson, James H.[1985], *Early Buddhism and Christianity in Korea: A Study in the Implantation of Religion*, E. J. Brill.

Grayson, James H.[1993], "Christianity and State Shinto in Colonial Korea: a Clash of Nationalisms and Religious Beliefs," *Diskus*, Vol. 1, No. 2.

Keene, Donald [2002], *Emperor of Japan: Meiji and His World, 1852–1912*, Columbia University Press. 邦訳、キーン、ドナルド、角地幸男訳『明治天皇』（全4冊）新潮文庫、2007年。

Lone, Stewart[1991], "The Japanese Annexation of Korea 1910: The Failure of East Asian Co-Prosperity," *Modern Asian Studies*, Vol. 25, No. 1, February.

Paik, Lak Geon, George,[1929] *The History of Protestant Missions in Korea: 1832 - 1910*, Yonsei University Press, revised edition, 1971.